青年期女性の人格発達における男根性の統合に関する研究

Phallus Integration in the Personality Development of Female Adolescents

ジェイムス　朋子 JAMES, Tomoko

● 国際基督教大学高等臨床心理学研究所
Institute for Advanced Studies of Clinical Psychology, International Christian University

Keywords 男根性覇気態勢，男根性自己愛態勢，エディプス葛藤，人格発達，青年期女性
Position of phallic energy, position of phallic narcissistic defense, oedipus complex, personality development, female adolescents

ABSTRACT

Since S. Freud, the female phallus has been deemed as fixation and a consequence of unresolved penis envy, and thus a significant factor obstructing the maturation of femininity. As an exception, Jacobson (1937) clarified the developmental significance of internalization and integration of the female phallus into femininity by conceptualizations such as 'inner penis'. However, discussion on phallus integration seems to be limited after her contribution. Therefore, the purpose of this study is to make clear the conditions for phallus integration in female personality structure, making distinction between the defensive phallus (the so-called "penis envy") and the integrated phallus, which is a key factor for the developmental task of ego-identity. In this study, the integrated phallus was conceptualized as the "position of phallic energy", which was distinguished from the "position of phallic narcissistic defense". In the experimental case studies, these two positions were clearly confirmed. That is, it was observed that the "position of phallic energy", which was conceptualized as the developmental key, was related to the confrontation of the Oedipus complex, which is the main developmental task for adolescents. Furthermore, a latitudinal study was conducted with the purpose of confirming these two positions are developmental concepts that can be aligned on a continuum, and to identify and examine the mechanisms that would lead to the developmental shift between the two positions.

研究の背景：

女性患者の分析の中で，Freud, S. はペニス羨望が女性性の大きな抵抗となり，女性性成熟を阻害する最も大きな要因となると考え，女性が成熟するためにはペニス羨望を放棄するしかなく，そしてそれは非常に難しいものと考えた（1925, 1931，1933），彼の跡をついだMarie Bonaparte (1953)，Helen Deutsch（1945），Jeanne Lample de Groot（1933）ら分析家たちは，Freud, S. と同様，女性の能動性は女性の未解決なペニス羨望の結果の固着とみなした．

最初に女性の内的ペニス幻想を男性性へのコンプレックスとしてではなく女性性としてみなしたのは，Jacobson. E.（1937）である．彼女は早期の少女の性器的体験を重視し，父親への愛情を女性的なものとみなして，父親への同一視が女性の超自我発達の基礎となると論じた．つまり，女性の人格発達は特有のリビドーによって生じるのであって，ペニスの「不在」によって基礎づけられるのではないことを初めて強調したことになる．Jacobson, E. の功績は，女性の人格発達理論において女性の成熟が，ペニス羨望あるいは男根性に関わる葛藤を放棄することによってのみ成され得るという考えから，内的ペニスという概念化によって，女性が男根性を女性性の中に内在化し統合することの人格発達的意味を明らかにした点である．

その後，Torsti（1994）は，女性が男根性を内在化する過程に注目し，男根的防衛態勢と機能的ペニス同一視という二つの視点を取り入れた．それまでの防衛としての男根性から，機能的な男根性の存在を概念化した点で興味深い．

一方，男性の人格発達理論において，「男根性」概念は，性器性と対象愛の葛藤であるエディプス位相（後半）に先行する真の性器性の前身としての性器的関心の時期（前半）に大きく獲得される自我のエネルギーを指す概念として，定義が進展している．具体的には，「正面攻撃」，「競争の楽しみ」，「目標達成への執念」，「征服の喜び」（Erikson, 1950），「覇気や冒険好き，進取の気性，勇気，野心」（Blanck, 1984）など，主張性，積極性，自己愛的能動性（小谷, 2001）を担う自我のエネルギーであり，三者葛藤であるエディプス・コンプレックスを克服する上での力になる（小谷, 1993）ものとされている．しかしこれら男性の人格発達で重視される能動性の獲得過程は，等しく女性の人格発達においても重視されるべきであるにもかかわらず，その検討が全く取り残されているのが現状である．

研究の目的:

女性の人格発達過程において，男根性を統合することの難しさは理論を越えて議論されてきている．性器性を現実的に受容することが課題となる青年期女性においてはその困難さはなおさらである．しかしながら，いずれの発達時期においても，男根性が統合された状態に関しての議論は非常に乏しい．本研究は，自我同一性を確立する時期である青年期女性に焦点をあて，その課題達成の促進の鍵となる人格構造として，男根性の統合された状態を明らかにすることを目的とする．

研究の意義：

自我心理学はReich, W. の抵抗分析技法に代表されるように，防衛的に退行した自我状態は扱わず，成長促進的な自我機能に目を向けそれを顕在化することを治療原理とした治療体系である．従って，本研究により，防衛態勢としての男根性と区別して男根性が成長促進的なものとして人格に統合された様態を理論的にも現象的にも同定できることは，実際の心理臨床技術の拡大に大きく貢献するものと考える．特に，成長促進的な男根性は，プレ・エディパルからエディパルへの移行期の歯止めとなるものであり，これは言い換えると，Kernberg（1996）が言うところの，プレ・エディパル人格構造からエディパル人格構造との間に位置し，その退行を阻止する歯止めとなることを意味する．したがって，

その退行が症状形成力動である女性の摂食障害や演技性障害などの困難事例の治療に対しその治癒像とそれまでの治療プロセスを提供する点で大きく貢献するであろう．また，成熟した人格像を明確にできることは，健常な青年期の発達プロセス理論を提供するものであり，男根性の統合状態からその一端を明らかにすることの心理教育的意義も大きいものと考える．

研究仮説：

以上の目的に即し，本研究の研究仮説は以下のように設定された．

女性の人格において，男根性は，先行研究で言われているような女性性を確立していく上での様々な葛藤に対する防衛として機能するだけでなく，女性性の中に統合され，成長促進的に機能する男根性の状態が存在する．したがって，本研究で研究対象とする青年期女性において最も大きな発達課題となる「エディプス・コンプレックスへの直面」に対し，それを回避するための防衛としての男根性だけでなく，それを促進する男根性の存在が認められる．

研究の組み立て：

本研究は，上記の目的および仮説に則し，以下の構成で行った．

理論研究

先行研究の整備から明らかになった問題点から，本研究で検討する仮説理論を構成するために必要な理論的根拠を明らかにした上で，女性の男根性の統合状態に関わる概念を仮説的に構成する．すなわち，文献研究により，青年期女性の人格発達において防衛としての男根性と成長促進に寄与し男根性が統合された状態としての男根性とを区別して，概念構成を試みる．その理論的枠組みとしては，主に精神分析理論（Kernberg. 1976）およびシステムズ理論（Kissen & Kotani, 1983）における発達理論，人格理論を用いることとする．この二つの理論枠組みは小谷によって統合が図られつつあるものである（小谷，1993）．

実験的事例研究

上記理論研究によって仮説的に構築した女性の男根性の統合状態を示す低統合状態と高統合状態の構成概念を臨床データにより傍証する．そのために，本研究で問題とする構成概念を取り出すために実験的に構造化した事例を用いて実験的事例研究を行う．ここで取り出す構成概念は，統合状態の程度を示す連続性を有すプロセス概念であるが，実験的事例研究による複数事例の横断的研究により，その低統合状態と高統合状態のそれぞれを分けて取り出し，その両者が差異の認められる二つの態勢として取り出せるかどうかによって仮説概念を傍証する．これらの分析視点は，理論研究と同様，精神分析理論およびシステムズ理論を統合して用いる．上記の２研究を通じ，事例研究による精緻化を行い，青年期女性の人格発達理論として再構成する．

心理療法事例研究

実験的事例研究によって傍証した女性の男根性の統合状態を示す低統合状態と高統合状態の構成概念を，さらに長期事例を用い，縦断的研究によって精緻化する．すなわち，男根性の低統合状態が高統合状態に変化するかどうかを事例により示し，低統合状態と高統合状態の両仮説概念がプロセス概念であることを傍証する．さらにその変化過程から，精神内的力動の変化メカニズムを抽出し，青年期女性の男根性の統合がどのようなメカニズムによって果たされるのかを明らかにする．これらの分析視点も，上記研究と同様，精神分析理論およびシステムズ理論を統合して用いる．

理論研究の概要と結果：

理論研究より，「男根性自己愛態勢」と「男根性覇気態勢」の二つの概念が同定された．

男根性自己愛態勢

先行研究の概観から，「去勢コンプレックス」は「身体イメージに統合された自己表象や自己愛，自己の能力等，すなわちいわゆる『男根性』

が攻撃されると感じたり，それを恐れること」とまとめられる．そしてこの「去勢コンプレックス」の状態は，女児のエディプス位相に移行する際の困難に対する防衛態勢に起因するものである．Torsti（1994）は，治療経験の中から，女性の人格構造において「機能的ペニス同一視」と「男根性態勢」と言う言葉を分けて用いている．残念ながらその両者の明確な定義づけがないが，ここで彼女の言う「男根的防衛態勢」とは，従来言われてきた「去勢コンプレックス」を指す概念としてみなすことができよう．本研究では，上述の先行研究にのっとり，防衛としての退行状態であることをより明確に区別する概念として，「男根性自己愛態勢」とする．

男根性覇気態勢

Torsti（1994）は，女性が女性性の中に男根性を統合した姿を，先に述べたように「機能的ペニス同一視」と呼んだ．これは，先に「男根位相」の特徴としてまとめた男根位相特有の父親への同一視，すなわち防衛的ではなく機能的な同一視を，幼児期の発達過程におけるものに限らず，女性の男根性の統合と女性性の獲得という大きな成熟過程の中でのより一般的な機制として捉える概念であるものと解される．ただしここで，「同一視」は心理機制を指す概念であるため，「男根的防衛態勢」と並列におくことはできない．よって，本研究では，先に定義し直した「男根性自己愛態勢」に並列する概念として，機能的同一視の産物が「覇気」（Blanck　1984），「男根性覇気」（小谷　2001）と言われていることから，そのような機能的同一視が優位に働き得る態勢として「男根性覇気態勢」と定義付けることとする．

このような機能的な「男根性覇気態勢」は，Blanck（1984）の「覇気」の概念より，より明確には以下のような性質を持つものと考える．すなわち，「覇気」とは，「個人をさらに発達の高次のレベルへと駆り立てる非敵意的な攻撃欲動とつながる自律的機能」（Blanck，1984）を持つものであるとし，①欲動欲求が対象関係欲求を従属させていること（Blanck，1984），そして②能動性，先導性，野心や勇気（Blanck，1984）などとして現れ，成長促進的な推進力としての攻撃欲動が対象指向的な敵意と区別されていること（Loewald，1980）である．

理論研究によってもたらされた作業仮説：

理論研究より，本研究で仮に防衛的性質を持つ「男根性自己愛態勢」とは区別された発達促進的態勢としての「男根性覇気態勢」を，以下の２点によって定義づけられた．すなわち，①欲動欲求が対象関係欲求を従属していること，②成長促進的な推進力としての攻撃欲動が対象指向的な敵意と区別されていること，である．

この「男根性覇気態勢」を特徴付ける２点と，発達促進的機能は，以下のように説明できる．

①「欲動欲求が対象関係欲求を従属する」（Blanck, 1984）ということは，対象関係の質によらず，欲動欲求がアウトプットされることを指す．したがって，フィードバック・システムの機能状態において，ポジティブ・フィードバック・サイクルの優位性が確認されるかどうかによって，確認することが可能である．

②「成長促進的な推進力としての攻撃欲動が対象指向的な敵意と区別されていること」（Loewald, 1980）ということは，攻撃欲動が中和化されていること＝能動性，先導性，野心や勇気（Blanck, 1984）を指す．したがって，フィードバックとしてのアウトプットでなく，攻撃欲動そのものの取り扱いとして，起動性があるかどうかによって，確認することが可能である．

③発達促進的に機能するということは，ともすると防衛されがちな目前の発達的課題を潜伏させず，葛藤しながらも，その葛藤的な課題に直面を果たすことから始まる．本研究で対象とする青年期は，精神分析的精神発達理論からするとエディプス・コンプレックスの再燃時期であるため，エディプス・コンプレックスに対する直面が発達課題である．したがって，エディプス・コンプレックスが顕在しているかどうかによって確認することが可能

である．このエディプス・コンプレックスとは，三者葛藤（Blanck, 1984, Horner, 1990, 秋山, 2001）を指すものであり，すなわち，父親対象・母親対象それぞれに対するエディプス願望や恐れ，および，両親ペアの間に自分とは関係なく存在するボンドの認知とそれに対する情緒体として同定することが可能である．

以上のことから，以下の作業仮説が置かれた．

「男根性覇気態勢」は①フィードバック・システムの機能状態として，ポジティブ・フィードバック・サイクルの優位性が確認されること，②攻撃欲動の取り扱いとして，起動性の優位性が確認されること，の２点によって操作的に取り出すことができる．この２点によって取り出された「男根性覇気態勢」にある個人は，エディプス・コンプレックスとして，エディプス三者葛藤布置（父親・母親それぞれに対するエディプス願望や恐れ，両親ペアにのボンドに対する認知）が顕在している．

実験的事例研究の概要と結果：

理論研究によってもたらされた作業仮説をもとに，欲動エネルギーを安全に表出することを支持された実験的グループを構成し，同じく作業仮説に即して設定され，妥当性・信頼性の確認された評定基準を用い，男根性の統合状態として「男根性覇気態勢」と「男根性自己愛態勢」を取り出した．その結果，青年期女性において「男根性覇気態勢」の優位性が確認された事例では，全ての事例において，エディプス葛藤布置が顕在しており，逆に「男根性自己愛態勢」の優位性が確認された事例では，エディプス葛藤布置が潜伏していた．このことから，仮説は支持され，本研究で新たに人格発達的な意味のある概念として同定した「男根性覇気態勢」が青年期の人格発達における最も基本的な課題としてのエディプス葛藤への直面に関連しているという点から，それが「男根性自己愛態勢」とは異なり，人格発達に関連する態勢として認められるものであることが示された．ここで取り出した構成概念は，低統合状態から高統合状態という統合状態の程度を示す連続性のあるプロセス概念として仮定されたものであるが，実験的事例研究による複数事例の横断的研究では，その発達的連続性を明らかにすることはできない．

心理療法事例研究の概要，結果および総合考察：

心理療法事例研究によって，実験的事例研究によって取り出された二つの男根性の統合状態が，発達概念として明確に連続性を有するものであるかの検討を行った．男根性の未統合状態である男根性自己愛態勢にある女性事例が，心理療法作業によって男根性覇気態勢に変化すれば，その両概念の連続性が認められることになる．

「男根性自己愛態勢」にあり，それが問題の中核であるとみなされた青年期女性が，心理アセスメントによって同定され，「男根性自己愛態勢」から「男根性覇気態勢」への変化を目的に治療計画が立てられ，精神分析的心理療法が本研究者によって行われた．心理療法の実施に際し，治療構造，介入手続きにおける研究者による歪みを最小限に止め，かつ歪みが生じた場合，逐次次回の面接で修正できるよう．毎回の面接を同一スーパーバイザーによって同僚セラピスト５名の立ち会いのもとで検討する手続きが取られている．インテーク時および変化後のアセスメントの機軸として，全体的な人格構造および男根性の統合状態の二点を定め，アセスメント用具として，人格構造については，Kernbergによるnormal personalityの理論（1996）から作成されたAssessment of Identity Functions for Adolescents: AIFA（橋本・秋山他, 2003）が，男根性の統合状態については先の理論研究によって設定された評定基準が，変化メカニズムの分析には，精神分析理論（Kernberg, 1976）およびシステムズ理論（Kissen & Kotani, 1983）が用いられた．

結果，１年半，計60回の面接記録の分析より，「男根性自己愛態勢」から「男根性覇気態勢」への変化が同定された．「男根性自己愛態勢」と「男根性覇気態勢」が連続線を有す発達概念であ

ることが示されたのである．またその変化メカニズムを明確にするために，特徴的な事例セッションのインシデント分析が行われ，転換メカニズムとして，以下のことが示唆された．

研究事例は，異性関係において男根的欲求と異性対象に対する性的欲求，未解決のエディパルな性愛・被愛願望が圧縮されて混乱状態を呈していた．これらの様々な欲求や衝動が分化し，性器統裁の基へと再構成されていくためには，明確に男根性覇気態勢が安定してあること，すなわち，欲動エネルギー備給における能動態勢が安定して存在し，そこでの主体感覚が明確にあることが，基点となることが示された．そしてこのような男根性自己愛態勢から男根性覇気態勢への転換は，女性セラピストとの間で男根的欲求を持ってやり取りする場面において急激に促進することが示された．このことから，「男根的欲求で繋がることのできる女性という外的対象関係の広がりを得られることにより，父親へのエディパルな願望を勤勉性として昇華すること」が可能となり，異性対象に対する性的欲求の圧縮が解除されることが示唆された．これは，発達的には潜伏期課題として見ることができるものである．潜伏期において上記のような発達課題が未解決に取り残され，エディプス葛藤の修正が起こらないままに性器性が加わる青年期まで持ち越されると，様々な欲求の混乱・圧縮の結果，「男根性自己愛」という困難な課題としてそれは再度現れることが示唆される．「男根性覇気態勢」は，この課題を解除し，青年期の異性対象に対する性的欲求，未解決のエディパルな性愛・被愛願望，男根的欲求にベクトル性を与えるものである．それは，対象愛の葛藤に圧倒されてしまうことなく，欲動備給が十全にされうる状態を意味し，自身の衝動や欲求を飼い慣らし，検討し，成熟を促進することにおいて，対象関係の広がりを利用することのできる状態である．このように「男根性覇気態勢」の獲得は，潜伏期において一定の安定を得る人格構造とみなされるが，青年期に至り人格に性器性が加わったとき，再度その「男根性覇気態勢」の内在化が課題となる．女性は性愛欲動の充足において，生物学的にも社会文化的にも受動的側面が男性に比べて多く，特にその特徴は実際に異性対象との間で自分の性器性を新たに獲得していく青年期には強められるため，この課題が女性としての性器性の統合過程においてより重要なものとなることが示唆された．最終的には一事例研究によるものであるが，本研究により，女性の人格構造において男根性が統合された状態としての男根性覇気態勢の存在が認められ，青年期アイデンティティ確立過程におけるその態勢の人格発達的意味が示された．

＊本論は，国際基督教大学提出博士論文の一部を抜粋したものである．

引用・参考文献

1. 秋山朋子（2001）青年期女性の精神分析的精神療法におけるエディプス・コンプレックスの徹底操作の初期課題ICU大学院臨床心理学プログラム報告書，2000年度，69-77.
2. 秋山朋子・小谷英文（2002）女性の精神分析的精神療法におけるエディプス理論再考　広島大学保健管理センター研究論文集，第18巻，25-36.
3. Blanck, G.（1984）. The Complete Oedipus Complex. *International Journal of Psycho-Analysis*, 65, 331-339.
4. Bonaparte, M.(1953). *Female sexuality*. New York, Int. Univ. Press.
5. Deutsch, H.(1945). *The psychology of women*. New York, Grune & Stratton.
6. Erikson, E. H.(1950). *Childhood and society*. New York. Norton. 1.
7. Freud, S.(1925). Some *psychical* consequences of the anatomical distinction between the sexes. S. E. 19. London Hogarth press.
8. Freud, S.(1931) Female sexuality. *S. E.* 21. London Hogarth press.
9. Freud, S.(1933) Femininity. *S. E.* 20. London Hogarth press.
10. 橋本和典・秋山朋子・小谷英文（2003）青年期アイデンティティグループに関する研究（3）－健康な人格構造の査定調査法の開発　日本心理学会第67回大会発表論文集.
11. Horner, A.(1990) The Oedipus Complex. In, The

primacy of structure-psychotherapy of underlying character pathology. (pp. 245-265,) New Jersey. Jason Aronson Inc.,
12. Jacobson, E.(1937). The effect of disappointment on ego and superego formation. *Psychoanal. Rev., 33*, 29-147.
13. Kernberg, O.(1977). Boundaries and structure in home relations. *JAPA, 25,* 81-114.
14. Kernberg, O.(1996). A psychoanalytic theory of personality disorders. In J. F. Clarkin & M. F. Lenzenweger (Eds.). Major theories of personality disorder. (pp. 106-140)New York The Guilford Press.
15. Kissen, N. & Kotani, H.(1983). A glossary of general systems terms relevant to the fields of group dynamics and group psychotherapy. *Group Approach, 2*, 45-56.
16. 小谷英文(1993)ガイダンスとカウンセリングー指導から自己実現への共同作業へー北樹出版
17. 小谷英文・中村有希・秋山朋子・橋本和典(2001) 青年期アイデンティティグループー性愛性と攻撃性の分化統合を中核作業とする技法の構成ー. 集団精神療法. 17 (1). 27-36.
18. Lample de Groot, J. (1993). Problems of femininity. *Psychoanal*. Q. *2*, 489-518.
19. Loewald, H. W.(1951). Ego and reality. *Int. J. Psycho-Analysis, 32*, 10-18.
20. Torsti, M.(1994). The feminine self and penis envy. *Int. J. Psycho-Anal., 75,* 469-478.